

## 魔術師メルランのブルターニュ ——近代フランスにおけるフォークロア学の誕生——

梁 川 英 俊

フランス北西部の半島に位置するブルターニュ地方 — 今日フランスでもっとも地域的アイデンティティーの自覚が強い場所として知られるこの地方には、「神話と伝説の里」といういまひとつの顔がある。

もっとも、この二つの顔は切り離せるものではない。なぜならブルターニュのアイデンティティーとは、ギリシャ・ラテンの嫡子を自認するフランスの一部でありながら、その出自をケルトに求めようとする点にあり、その根拠となるのがケルト系の言語であるブルトン語であり、また古代ケルトの面影を伝える神話や伝説群だからである。実際、この土地は口頭伝承の宝庫として、19世紀以来フランスのフォークロア学の発展に多大の貢献をしてきた。

そのブルターニュ地方のフォークロアの歴史を、ひとりの神話的人物とともに概観すること。これが小論の目的である。導き手となる人物は、メルラン Merlin。英語読みでマーリンと言った方がなじみ深いかもしれない。いうまでもなく「アーサー王伝説」の主要な登場人物として、西欧で広く人口に膾炙する「魔術師」である。

なぜメルランか。恣意的な選択ではない。ブルターニュのアイデンティティーの自覚は、ある意味でこの人物とともに芽生え、発展してきたとも言えるからだ。神話は現実から生まれるばかりでなく、また逆に現実を生みもする。以下は、その好例と言えるかもしれない。

### メルランの登場

いかにも魔術師然とした長い衣に身を包み、木杖を手にした白髪白髭の老人一。

今日私たちが知るステレオタイプなメルラン像を手短に言えば、こんな風になるだろうか。いずれにせよ、アーサー伝説関連の書物の挿し絵はもとより、ディズニーの映画や移動遊園地の遊戯具を彩るペンキ絵のなかにいるメルランは、大方こんな恰好をしている。しかしこうしたメルラン像が形成されたのは、実はそれほど昔のことではない<sup>1</sup>。

メルランの名が初めて文献上に現れるのは、1134年頃。ジェフリー・オブ・モンマス Geoffrey of Monmouth の『メルランの予言』 *Prophetia Merlini* においてである。しかし、この著作は文字通りメルランによる予言を書き留めただけのものであり、その人物像が記されているわけではない。それが描かれるのは、同じ著者によってほぼ4年後に執筆される『ブリタニア列王史』 *Historia Regum Britanniae* (『メルランの予言』はその第7章に組み込まれた) が最初である。いうまでもなく、この作品は「アーサー伝説」の歴史化の端緒となった書物として今日広く知られている。ここで、メルラン、ラテン名メルリヌス・アンブロシウスは、7歳にしてすでに予言能力を身につけた賢児として登場し、王位篡奪者フォルティゲルンの破滅と、異民族の侵入により周縁の民族と成り果てたブリトン人の再生を予告する。しかも彼はまた超自然的な力を発揮してアーサー王の誕生を導き、やがて若き王の指南役となって全ヨーロッパ征服の手助けをする。つまりアーサー伝説の舞台を設える演出家にして、登場人物を背後で操る黒子、それが『列王史』におけるメルランなのである。

ところで、モンマスとメルランの関係はこれで終わらない。『列王史』のほぼ10年後、モンマスは今度はこの人物のみを採り上げ、『メルラン伝』 *Vita Merlini* (1148年頃) なる書物を著している。しかし、そのメルランは『列王史』のそれとは随分違う。いまやメルランは仲間の死を悼むうち狂気の発作に襲われる狂人、森へ逃れ、そこを住み処とする「森の人」、獣たちと生活を共にし、牡鹿に跨がって城を襲う野人である。いや、それも単なる狂人や野人ではない。このメルランは予言能力をもつのはもちろんのこと、先祖たちの思考や自然の神秘に通じ、鳥の飛翔、星の運行、魚の遊泳についても知らぬことはない、文字通り森羅万象に通じた叡知の人としても描かれているのである。

この書物によりメルランという人物は一層その謎と深みを増した。実際、『列王史』と『メルラン伝』のメルランのあまりの相違は読む者に混乱を与え、12世紀の歴史家ギラルデイス・カンブレンシスは「ふたりのメルランがいる」という説を唱えもした。では、なぜこうした相違が現れたのだろうか。

一説によると、モンマスが『メルラン伝』の執筆に際して、ウェールズに伝えられるミルディンに関する民間伝承を参照したためであるという。この「森の人」ミルディンをめぐる伝承は、12-13世紀頃に成ったとされる『ハージストの赤本』や『カマーゼンの黒本』などの写本に収められており、現在でも目にする事ができる。が、バルドにして予言者でもあったと伝えられるこの人の実在については、確たる証拠はない。たぶんドルイドの残党だったのではないかとされているが、推測の域を出ない。歴史的人物としてのメルランは霧の中にある。いずれにせよ重要なのは、メルランという人物がモンマス個人による完全な創作ではなかったということ、その人物の造形に際しては、ケルト特有の民間伝承や歴史書の記録等、当時の社会に存在したさまざまな要素が陰に陽に影響を及ぼしていたということ、である。

ともあれ、こうして登場のときからすでに曖昧模糊とした姿であったメルランは、中世における「アーサー伝説」の物語化の過程で、以後もさまざまな変貌を蒙っていく。たとえば、名高い「円卓」はメルランの手になるものとされ、そこに座る騎士たちを選ぶ役割も彼が引き受けることになる。アーサー伝説がキリスト教に結びつけられると、メルランは悪魔の子とされ、すぐに洗礼を受けたので邪悪さが薄れたのだとも言われる。さらには自分が魔術を教えた弟子のヴィヴィアンヌによって「空中の牢」に閉じ込められるという不運に見舞われもする……。メルランのイメージは、これら数々のエピソードによって厚みを増し、人々の想像力のなかに堆積していくのである。

しかし中世には隆盛を誇ったアーサー伝説も、古代ギリシャ・ローマの復興を説くルネッサンス以降、そのあまりに空想的な性格のゆえ、時代の理性的・実証的な風潮に押され、急速に忘れ去られてしまう。時代が再びメルランという異界の存在を見いだすには、ロマン主義の到来を俟たなければならない。そ

のとき、この中世の予言者・幻術師は、ようやく現在の「魔術師メルラン」Merlin l'Enchanteurとして私たちの前に姿を現すことになるのである<sup>2</sup>。

### メルランの目醒め

ブルターニュの主邑レンヌから西南約40キロのところにある「パンポンの森」――。かつては夥しい樹木が鬱蒼と生い茂ってたと伝えられるこの「森」も、いまでは平原や低灌木ばかりが目につく。ところで、この森の一角に「メルランの墓」がある。なんのことはない。一本のヒイラギの木と二枚の結晶片岩からなる、きわめて簡素な墓である。しかもその付近には、妖姫モルガーヌが不実な恋人を閉じ込めたとされる「帰らずの谷」や、霊力を秘めた不思議の泉として知られる「バラントンの泉」等、アーサー伝説ゆかりの名所が数多くある。そう、この森こそは、中世騎士物語の舞台となった、あの「プロセリアンドの森」とされる場所なのである――。しかし、ふたつの森はなぜ、あるいはいつから同一視されるようになったのだろうか。

先述したように、ルネサンス以来忘却のなかにあったアーサー伝説は、ロマン主義の高揚とともに再発見され、歴史のなかに蘇る。フランスでも18世紀末から19世紀初頭にかけて、関連する物語の近代フランス語版による出版が相次いだ。「ロマン叢書」は、1775年に『メルラン』を、1776年に『ブルターニュのアーサー』を出版し、1778―1791年にかけて刊行されたトレサン伯爵 De Tressen の選集の第七巻には、彼の手になる『アーサー』および『レオネのトリスタン』が収められた。さらに1811年には、クルゼ・ド・レセ Creusé de Lesser による韻文の『円卓の騎士』が出版され、これも評判を呼んだ<sup>3</sup>。

ところで、19世紀初頭のフランスには、ときならぬ好古趣味が広がっていた。発端は大革命後の「国民統合」のために実施された行政調査にあった。新たな行政区分の「県」を単位に行なわれたこの調査は、とりわけ地方の名望家のあいだに、それまで特別な関心をもたれることのなかった民衆文化に対する興味を呼び醒ました。それが好古趣味という形をとるようになったのは、革命によって断たれた過去へのノスタルジーからだという見方は、たぶん間違っていない。

彼らは自分の住む土地の見慣れた事蹟や風景のなかに、歴史や伝説のエピソードを読み込んでいった。この風潮は、ブルターニュでは蘇りつつあった「円卓」と結びついた。実在のパンポンの森と神話上のプロセリアンドの森が同一視されるようになったのも、こうした背景においてであった。もっともプロセリアンドに擬せられた森はほかにも幾つかあり、その比定にはそれなりの議論があった。それがなぜパンポンの森に落ち着くことになったか。きっかけは、ほかならぬメルランの墓の「発見」にあった<sup>4</sup>。

最初にその墓に言及したのは、モンフォールの治安判事ポワニャン J.-C. de Poignand だった。彼は1820年にレンヌで出版された『古代の歴史と遺跡』*Antiquité historiques et monumentales* のなかで、メルランとヴィヴィアンヌの墓に触れ、こう言っている。「というわけで、私はブレシリアンの森の外れ、テルオエ大修道院の近くにあるのが、メルランとその妻の墓だと考えたのである。墓そのものは、下に宝物が埋まっているという噂を聞いた民衆によって、20年ばかり前に毀されてしまったが、残骸はいまも同じ場所にある。それはサン・マロン村のランダイルと呼ばれるところで、この地名は「精霊の寺院」を意味する」<sup>5</sup>。

もっともポワニャンの関心は、自分の町を起点として、ブルターニュ出身の名将デュ・ゲ克蘭 Du Guesclin をめぐる歴史散策のための名所旧跡のリストを作成することであった。メルランに関する指摘は、ページ下の註で、いわば事のついでになされたにすぎない。

1824年、ポワニャンの弟子筋にあたるモンフォール在住の元予審判事、ブランシャール・ド・ラムユス Blanchard de la Musse は、師のこの指摘を再び取り上げ、クルゼ・ド・レッセの詩を参照しつつこう発展させる。「ムーから（イファンディク近郊の）シャスの城の背後を流れて流れるこの小川は、メル＝アオン、メルの川すなわち体躁教師の川と呼ばれている。この川は『円卓』（クルゼ・ド・レセ）の詩の第9の歌で、老メリアドゥスに喩えられたことで知られている。メルランとその妻ヴィヴィアンヌの墓を見つけるには、「帰らずの谷」に沿って、この川をプロセリアンドの森の水源まで遡っていかなければ

ばならない。と、メル川の流れに向かって右手の山の上、森の外れにそれはある。川はここで、いまではポン・ドン・ジャンの池と呼ばれる「巨人の橋の湖」のなかへと姿を消すが、そこからランスローのように深い森を分け入っていくと、アーサー王の妹、妖精モルガンの住んでいた美しい館、すなわちコンペルの城に行き着く……」<sup>6</sup>。

こうしてパンポンの森の風景に「円卓」の舞台装置が重ね合わされていく。もっとも、ここで言及されているメルランの墓は、今日のそれと同じものではない。帰らずの谷も、のちにその場所を変えた。つまりこうした地名の同定はきわめて恣意的なものだった。プロセリアンドが今日の形をととのえるまでには、二転三転があったのである。

それにしても、なぜメルランなのか。それは彼が当時ケルトの象徴と考えられていた、ドルイドと「円卓」という二つの要素を一身に兼ね備えていたからである。彼の墓としてまず巨石が挙げられたのも、当時はまだ巨石がケルトの代表的な遺跡と見做されていたからだった。メルランはいわばブルターニュのケルト的起源の保証人だったのである。したがって、彼をブルターニュに引き寄せようとする動きは以前からあった。生地をめぐる議論もそのひとつである。

たとえばカンブリー Cambry は、1799年に出版されたその名高い『フィニステール県旅行記』*Voyage dans le Finistere* において、1580年にフォルカテュリュス Forcatulus が唱えた「メルランはサン島の生まれではないか」という説を紹介した<sup>7</sup>。地元の好事家ケルダネ Kerdanet も、先のポワニャンもこの説をそのまま踏襲した<sup>8</sup>。さらに、ポーラン・パリヌ Paulin Paris は『円卓物語』*Roman de la Table-Ronde* のなかで、ロベール・ド・ボロン Robert de Boron の物語にメルランがブルターニュで生まれたと考える根拠となる記述があると主張した<sup>9</sup>。しかし、たとえメルランがブルターニュの生まれであると言ったところで、その議論は物質的な根拠を欠く。その点、墓の発見は、ブルターニュとメルランとの結びつきを目に見える形で示していた。ポワニャンが触れたメルランの墓の重要性もまた、そこにあった。

ところで1830年代になると、プロセリアンドの森の「遺跡」群のうちに、新

たに「バランTONの泉」が登場する。1827年に写本が整理されて出版されたワース Wace の『ロマン・ド・ルー』 *Roman de Rou* で、この泉が重要な役割を演じていたことが大きな理由だった。こうして、この頃からブロセリアンドの森の中心は、メルランの墓からバランTONの泉へと移っていくことになる。

1837年、ブルターニュ出身のひとりの若い貴族がメルランの墓を訪れる。同年、彼は「パリ評論」 *Revue de Paris* にその訪問記を発表する。彼はこう書いている。「子供の頃、私はメルランの話しを幾度も聴いていたし、ブルターニュの騎士物語で、その墓やブレシリアンの森やバランTONの泉やコンコレの谷にまつわるさまざまな不思議を読んでいた。だから、ぜひ一度この場所を訪れてみたかったのである。とある晴れた朝、私は出掛けた。(.....) ブルトン語でコンコレと呼ばれ、中世騎士物語では「妖精の谷」と呼ばれる平原は、仄暗い森で覆われた巨大な斜面だった。そこはかつて「ドルイドの権力の森」 *KOAT bréc'hal-léan* と呼ばれていたが、いまでは崩れてブレシリアンと呼ばれている。この平原の片隅に泉がひとつあり、そこに苔むした石がふたつあって、虫に喰われた古い木製の十字架が辺りを睥睨している。これがバランTONの泉、そしてメルランの墓である。あの老いたドルイドはここに眠っているのだ。水のつぶやきとヒースの茂みを渡る風のうねりに囲まれて」<sup>10</sup>。

さて、この訪問者はパンポンの森がブロセリアンドであることに、もはやなんの疑いも抱いていない。1820年代には議論を呼んだこの比定も、30年代後半にはすでに自然なものになっていたのである。もっとも、この訪問者がメルランの墓だと考えているのは、ポワニャンが指摘した巨石ではない。それはバランTONの泉にある、いまでは「メルランのペロン」として知られている石である。時流のせいだろうか、メルランの墓はいつしかバランTONの泉のなかへと移っていたのである。

ところで、この訪問記の著者は、古文書学校の卒業生で、当時まだ22歳の若者だった。彼の名は、テオドール・エルサール・ド・ラヴィルマルケ子爵 *Théodore Hersart de La Villemarqué*。のちに伝説的な書物『バルザズ・ブレイス』 *Barzaz-Breiz* の著者となる人物である。

## メルランとラヴィルマルケ

『バルザズ・ブレイス』の出版は、まさに19世紀の文学的事件のひとつだった。この作品は著者によってバス・ブルターニュ地方で収集・翻訳され、注釈を付された伝承歌の集成と銘打たれていた。ジェームズ・マクファーソン James Macpherson の『オシアン之歌』以来、ヨーロッパの文学愛好家は民間伝承に夢中だった。が、自国の伝承歌が一般大衆向けに出版されたことは、フランスでは一度もなかった。この分野には、ドイツではすでにグリムが、スコットランドではウォルター・スコットがいた。しかし、フランスではその開拓はまだ十分ではなかった。のみならず、伝承歌という点では、この国はほかの国ほど豊かではないのではないかとさえ思われていたのである。ラヴィルマルケの書物の登場にこれほど相応しいときはなかった。この作品は待望されていたのである。事実、反響は大きなものだった。ジョルジュ・サンドはこの作品を評して「かつてもっとも偉大な詩人やもっとも詩的な民族が生み出したもの」に比肩すると言い、「実際、ものを書く人間なら誰でもブルトン人に出会ったら帽子を脱がずにいられないだろう<sup>11</sup>」と絶賛した。こうした称賛の声に押されて、1858年に著者はついにフランス学士院の会員にまでなる。

しかし『バルザズ・ブレイス』は、その引き起こした熱狂にもかかわらず、その登場からほぼ30年を経て、激しい批判に曝されることになる。ブルターニュの民俗学者の間で、その真正さに疑問が投げ掛けられ始めるのである。その後、延々と続くことになる「バルザズ・ブレイス論争」の始まりである。そして、この書物の真偽性をめぐる議論のなかで、もっとも激しい異議申し立ての的となった歌のひとつは、ほかならぬ「メルラン」と題されていた<sup>12</sup>。

わざわざその墓に詣でたことからわかるように、ラヴィルマルケにとってメルランは生涯もっとも重要なテーマのひとつだった。1862年には、この人物を神話・歴史・伝説という三つの視点から論じた『ミルディン、あるいは魔術師メルラン—その歴史・作品・影響』*MYRDHIN ou l'enchanteur Merlin, son histoire, ses œuvres, son influence* という書物を出版しているほどである。もっと



もこうした強い関心にもかかわらず、ラヴィルマルケにとって重要だったのは、メルランという人物よりも、むしろ彼が体現している理念の方だった。では、その理念とは何か。それは、ガリアの一部であるアルモリカは、相似た言語で表現された文学的伝統をブリテン島と共有するというものだった。つまりラヴィルマルケにとってメルランとは、ウェールズ、コーンウォール、アイルランド、スコットランド、ブルターニュを包括するケルト民族の探求の象徴だったのである。

この「高貴な民族」に対するラヴィルマルケの情熱は大変なもので、今日、アルモリカとブリテン島の数千年にわたる関係の復興の第一の功績は彼に帰せられるほどである。そして『バルザズ・ブレイス』の目的もまた、ブリテン島から大陸に渡ってきたバルドたちを起源とするこの伝統の不断の永続性を示すことにあった。

十三カ月と三週間、私は森の中で眠り続けている。  
眠れ、我が子よ、我が子よ、眠れ、我が子よ、眠れ。  
一羽の鳥が上手に、やさしく囀るのを私は聴いていた。  
眠れ、等々<sup>13</sup>。

『バルザズ・ブレイス』に収められている「メルラン」は、こんな風に始まる。この歌はそのテーマ、長さ、言語の豊さという点から見て、この書物のなかでもまったく例外的なものだった。全体を構成するのは「揺りかごのメルラン」*Merlin au berceau*、「予言者メルラン」*Merlin-Devin*、「バルド・メルラン」*Merlin-Barde*、「メルランの改心」*Conversion de Merlin* という4つの断片である。著者はこう書いている。「ウェールズ人はこのバルドの詩をもつが、遺憾ながら12世紀と13世紀に国益のために内容を一新され、改竄された。アルモリカのブルトン人にとって、メルランを謡ったものといえば伝承歌が幾つかあるにすぎない。私はそのうち4つを見つけたが、いずれももとはひとつであった連作詩の断片で、内容も変ってしまっている。最初のものは乳母の歌。次の断

片では、メルランは魔術師ないしは予言者である。三番目は、完全なバラードで、メルランはたんにバルドであり豎琴の演奏家。四番目は、ブルターニュの聖人中もっとも愛すべき、福者カドクないしはカドにより改心したメルランを謡っている」<sup>14</sup>。

さて、『バルザズ・ブレイス』の目覚ましい成功ののち、幾人かの収集家が新たな歌を求めてブルターニュの方々に赴いた。しかし、彼らは一様に失望することになる。フランソワ・マリー・リュージェル François-Marie Luzel も、そのひとりだった。彼は文通相手だったトレギエ出身の大作家ルナン Ernest Renan にこう書いている。「私はわざわざド・ラヴィルマルケ氏の地方にも行ってみました。(.....) 私は行く先々で、農民や村のヴァイオリン弾きや乞食に訊ねました。結果はどこでも芳しくなく、『バルザズ・ブレイス』の著者にとって不利なことばかりでした。私はこの地方が他の土地と比べて民間伝承に乏しいことに驚かされました」<sup>15</sup>。

こうして徐々に『バルザズ・ブレイス』に対する疑念が口にされるようになる。ラヴィルマルケはオリジナルの大半に手を加えたのではないか。もっとも古いとされる歌は実は全部彼が作ったものではないか.....。1872年、リュージェルはついに『ド・ラヴィルマルケ氏の「バルザズ・ブレイス」の歌は本物か』*De l'authenticité des chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué* と題された一冊の小冊子を発表する。このテキストによって「バルザズ・ブレイス論争」にはますます拍車がかかり、リュージェルはラヴィルマルケの敵の頭目と目されるようになる。リュージェルは言う。「ラヴィルマルケは四半世紀以上もの間われわれを騙してきたのです。この抜け目ない男は、巧妙な山師なのです」<sup>16</sup>。

一方、当のラヴィルマルケは、こうした激しい批判にもかかわらず、自ら反論することはけっしてなかった。彼が公けに論争に参加することは一度もない。そしてこの頑な沈黙は、敵対者たちの確信を強固にするばかりだった。

論争の対象は、おもにその起源が太古の昔に遡るとされた歌にあった。そしてリュージェルは「メルラン」の歌を、グエンランやアーサー王やミノエ等の歌とともに贋作と見做した。このトレギエの収集家は、民間伝承ではメルラン

の名前すら聞いたことがないという事実を強調した。しかし、少なくともこの「メルラン」に関しては、リューゼルは勇み足を犯していた。1870年、オート・コルヌアイユ地方に旅行した折り、彼はある手紙にこう書いている。「この辺鄙な地方で、私はとうとうメルランの痕跡を発見しました。でも昔話のなかでだけです。歌では全くだめです。コロレの語り部で、大工のジャン・シュシェネックは、彼をメルランと呼んでいました。プルネヴェ・ド・ファウの語り部、ジャン・マリー・アン・ニーははっきりとメルリンと発音していました。(.....) 私がコロレの話を書きとめれば、きっとそこからなにか手掛かりが掴めるかも知れません」<sup>17</sup>。しかしリューゼルがこの話を書き留めることはけっしてない。ラヴィルマルケと違い、この学問的な収集家はメルランとはあまり縁がなかった。なによりも、彼にとってメルランは、ラヴィルマルケにとってそうであったような象徴的な意味をもたなかったのである。

「バルザズ・ブレイス論争」は、まず二人の著者の方法上の対立として理解される。リューゼルが『バルザズ・ブレイス』の刊行以後に確立された学問的方法を身につけていたのに対し、ウォルター・スコットの方法を奉じるラヴィルマルケは、この書物の序文で、オリジナルに手を加えたことを隠さなかった。しかしさらに根本的な対立は、両者の政治姿勢にあった。農民の生まれで共和主義者のリューゼルは、貴族出身のラヴィルマルケがメルランに負わせた民族意識をけっして共有しなかった。ラヴィルマルケにとって、偉大なケルト民族の遺産はなによりも美的な観点から評価されねばならなかったのである。彼が典拠しか問題としない論争に無関心であったのも、そのためだった。

いまでこそ私たちは、この論争に終止符を打ち、ラヴィルマルケの名誉を回復しようとしたドナシャン・ロラン Donatien Laurent の詳細な研究によって、1964年に発見されたノートの中に、この「メルラン」の草稿があることを知っている。ロランによれば、出版されたテキストにはその半分しか生かされなかったが、「その草稿の幾つかのシークエンスは、ラヴィルマルケがこの時代には絶対に知ることができなかった、ブリテン島の古代文学と同一の原典に基づくことを示すよく似た特徴をもっている」<sup>18</sup> という。ラヴィルマルケは、疑いも

なく、この歌をじっさいにコルヌアイユ地方で採取したのである。しかし、誰から聞いたのだろうか。ロランは、たぶんアナイク・ルブルトンからではないかと推測する。『バルザズ・ブレイス』の重要な典拠のひとつと見做される数多い歌の収集を残したラヴィルマルケの母、すなわち「ニゾンの貴婦人」が、1759年生まれのこの女乞食から、ラヴィルマルケよりも早く、メルランにまつわる別の歌を書きとっているからである。

さて、乞食がメルランの歌を謡うというこの事実は、私たちにラヴィルマルケの『ミルディン、あるいは魔術師メルラン』のなかの一場面を思い起こさせる。この書物の一章「小説に描かれたメルラン」のなかで、著者はメルランを樵に変装させて登場させる。「最初の使者が樵に出会った森に一行とともにやってくると、従者たちがこう叫んだ。「ごらん下さい、ほら、あの醜い片輪の間抜けのあとを、ぞろぞろと野生の動物が従っております」。彼らが指さす方向を見ると、粗布を身に纏い、羊飼いの杖に擬した棍棒を手にもち、ダマシカの群れを従えた、茫洋とした風体の奇妙な人物の姿があった」<sup>19</sup>。さて、樵は言う。「メルランなら近くにいる。彼のことなら最初に出会う乞食に聞けばいい」<sup>20</sup>。ところで、この乞食はほかならぬその樵こそがメルランであると言う。それにしても、なぜ乞食なのか。メルランと乞食との間にいったいどんな関係があるというのだろうか。

## メルランとブルターニュの下層民

どこであれ、人の行くところ、乞食たちが押し寄せ、空きっ腹を抱えて、さかんにしがみついてくる。何かやると、そのまま動かない。さらにやると、その数を増し、大群となって向かってくる。(.....) なにやら相手を怒らそうと心にきめているようで、そのしつこさはまったくもって手に負えない。(.....) 彼らはひどく貧しいのだ。肉などにありつけることは本当にまれ。(.....) パンだって毎日食べるわけにはいかない<sup>21</sup>。

1847年にマキシム・デュカンとともにフィニステール県南部を旅したギュスターブ・フローベールは、旅行記『野を越え、磯を越え』*Par les champs et par les grèves* のなかでこう書いている。出発前の一年間、綿密な下調べをしたという彼らではあったが、ことこの乞食の攻勢の凄まじさに関してはやはり予想外だったらしい。しかしこの旅行者泣かせの乞食たちも、当のバス・ブルターニュ地方では社会にとって必要な存在だった。ラヴィルマルケはこう言っている。「驚くことに、よそでは嫌われ、社会の屑であった人たち（乞食）が、ブルターニュでは敬愛され、愛情に満ちた崇敬の対象だったのだ」<sup>22</sup>。

事実、この地方では、乞食たちはしばしば親しみを込めて「神の宿る人」だの「神さまの兄弟」だの「聖イヴの客人」だのと呼ばれていた。しかもこうした神聖視は、彼らに「委託巡礼者」を始めとするこの土地特有のさまざまな宗教的役割を与えることにもなった。加えて、乞食たちは村々にニュースを伝えたり、結婚の仲介人となるなど、日常生活のなかでも積極的な役割を果たしていた。実際、公権力が安全上の理由から乞食の取締りに乗り出したときも、バス・ブルターニュ地方では容易にその数が減らなかった伝えられる。19世紀のブルターニュでは、乞食はまさに「背景」の一部だったのである<sup>23</sup>。

ところで、ここで私たちにとって重要なことは、その彼らがバス・ブルターニュ地方の口頭伝承の真の継承者であったということである。エミール・スヴェストル Emile Souvestre は『最後のブルトン人』*Les Derniers Bretons* のなかで簡潔に次のように言っている。「乞食はバス・ブルターニュ地方のバルドである」<sup>24</sup> と。さらに同じ本で、彼はまたこうも言う。「バルディスムはやがてブルターニュやウェールズでも衰え、タリエシンがその横行を雄弁に嘆いてみせた、放浪詩人や旅回りの歌手や乞食の伝承歌にとって代わられることになる。しかし、その彼らの歌こそ、12世紀もの転変のときを越え、形を変え、数を増しながら、われわれのもとに口から口へと伝えられてきた唯一のものなのだ」<sup>25</sup>。

ブルターニュの乞食たちは、いかにその姿がみすぼらしく見えようが、バルディスムの継承者であり、メルランの真の後継者だった。ここで前節の最後に引いた樵の言葉を思い出そう。「彼のことなら最初に出会う乞食に聞けばいい」。

この言葉の背後には19世紀のブルターニュ社会の現実が潜んでいたのである。さらに私たちは『バルザズ・ブレイス』の「メルラン」にも、乞食とメルランの関係を暗示する箇所を幾つか見つけることができる。「揺りかごのメルラン」には、「私の父は貧しい人を愛しているし、必要であれば助けるのです」<sup>26</sup>。「バルド・メルラン」では、「バルド・メルランよ、お前はどこから来たのだ、そんな襤褸をまとって。どこへ行くのだ、頭を覆うものもなく裸足で。そんな様子でどこに行くのだ、モチノキの杖を手に」<sup>27</sup>。さらに「メルランの改心」では、「貧しい人々は言っていた。「歌え、メルラン、変わらず歌え」。ブルトン人は言っていた。「歌え、メルラン、何が起こるか言ってくれ」。いまや私は森に住み、誰一人敬う人とていない。行く手には、狼や猪がいて、私が通ると、歯を軋らす」<sup>28</sup>。

いや、乞食ばかりではない。口頭伝承の収集にはブルターニュの下層民全体がかかわっていた。『バルザズ・ブレイス』の序文で、ラヴィルマルケはこう書いている。「私はとくに乞食や旅をしながら屑を買って歩く屑屋たちや、織工や粉屋や仕立屋や木靴職人、歌いながら放浪するこの地のすべてのひとに当たってみたのだ」<sup>29</sup>。

実際、19世紀の民族学者は下層民とつき合うということで、しばしば非難的になった。しかも彼らの活動は方言の存続を助長するもので、これは公権力が望まないことだった。この時代、「文明人」と「非文明人」は習俗や言語をはっきり異にする二つの世界をつくっていたのである。1851年にブランキ L. A. Blanqui はこう言っている。「二つの異なった民族が、同じ土地の上で互いに無縁と思えるほど異った生活を送っている。かつて存在したこともないほど強力な中央集権の軛が両者を捉えているというのに」<sup>30</sup>。

当時の民俗学者はこの二つの世界あるいは二つの民族に、いわば橋を架ける役目を果たしていたのである。そして先に見たように、メルランがブルトン人の記憶のなかに蘇ったのも、もとはと言えば、知識人の間における農民や貧民に対するこうした関心の芽生えと無関係ではなかった。なるほど、下層民たちは野蛮で、みすぼらしく、無邪気ではあるが、だからこそ遠い過去の伝統の真

の継承者なのだ、というわけである。たとえば、リューゼルの一番弟子で『死の伝説』*La Légende de la Mort*の著者アナトール・ルブラース Anatole Le Brazは、ブルトン人をメルランに擬し、もちまへの美文調でこう自問している。「なにゆえにヴィヴィアンヌの軛から解かれたメルランが、あたかも奇跡のように、その声を、しかも数えきれぬほど多くの声を再び我が物とし、その脳髓のなかに封じ込められた内なる音楽をことごとく解き放ち、プロセリアンドの永すぎる沈黙の葉叢の下に、忘れられた妙なる風のささやきを呼び醒ましたのか」<sup>31</sup>と。しかし、この問いには、まずその声が見事だったからと言う以外、いったいどう答えようがあるだろうか。

たしかにラヴィルマルケとリューゼルの間には有名な論争があった。しかし立場こそ違え、彼らにはひとつの共通点があった。それは自分たちが出会った口承文学に、二人とも深く心を動かされたということである。そして、その真正さを問う議論を越えて、いまなお私たちが彼らの残した書物のうちに見いだすものもまた、その疑いようのない、生き生きとした感動なのである。たとえば、ラヴィルマルケはこう言っている。「私自身もまた、そのひとがブルターニュと農家の炉端に座っているのを見たことがある。聖パトリックがその声に耳を傾けていた時代に劣らず、その目はらんらんと輝き、足取りは機敏で、耳は繊細、記憶力は優れ、心は熱かった。名を問えば、こう答えただろう。「私はケルトの伝統である」と。フランスで、イギリスで、スコットランドで、メルランの物語が書きとめられたのは、まさにこの人の口づてによるのだ」<sup>32</sup>。一方、ラヴィルマルケの民族主義もロマン主義も共有しないリューゼルは、容易く感動の言葉など口にしはしない。しかしその彼でさえ、織工を生業とするある民衆劇団の役者に接した少年時代の経験を、こんな風に回想している。「アラン・グリウーはケランボルンによく布を織りにやって来た。そして日がな一日、私は彼の仕事に見とれ、彼が自分の役柄の長台詞を朗々と唱えるのを全身これ耳にして聴いていたものだ」<sup>33</sup>。

自らが見いだした口承文化の遺産を前にして、二人が覚えた驚きと感動を疑うことは、たぶん誰にもできまい。そしてこの生き生きとした感動は、その作

品の出版から一世紀以上のときを経て、なお幾つもの人生を変えたのである。「カナール・アンシェネ」の元時評欄担当者でブルトン語の擁護者であったモルヴァン・ルヴェスク Morvan Lebesque は、1970年に出版した本のなかでこう言っている。「ペラン社のバイリンガル版の『バルザズ・ブレイス』は、私にとってまさに啓示だった。もう「著者」のことなどどうでもよかった。私の前に立ち現れたのは、ブルトン民族だった。(.....) 一個の集合的才能、時代を越えて流れる一個の意志のみが、こうした詩にそのイメージを、真に演劇的な意味での劇的なリズムを与えていたのだ.....」<sup>34</sup>。

19世紀は、民間伝承というものが、保存される価値のある共通の宝であることを明らかにした。メルランの声はいまや永遠の生命を獲得したかに見えた。が、実際にはその声はか細さを増し、もはや窒息寸前だった。リュージェルはルナンに、性急な調子でこう書いている。「私はこれまで以上に口頭伝承の収集に没頭しています。いまそれをやっておかねば、こうした伝承歌や民話は永久に消え去ってしまうことでしょう」<sup>35</sup>。この手紙は1872年のものである。口承文化終焉の時代、20世紀はすでに間近に迫っていたのである。

## メルランとピエール・ジャケ・エリアス

今世紀になると口頭伝承は完全に息絶える。初等教育の普及とともに、国語としてのフランス語は、他のあらゆる方言を駆逐し、至るところで至上権を揮う。農民の多くが故郷を離れ、町に住み始める。こうして口承文学の支え手であった文盲の人々は、次第に珍しい存在になっていく。ブルトン語で「森の国」を意味する「アルゴア」Argoat の名で呼ばれたブルターニュ内陸部は、産業の必要から盛んに開発され、森の大半を失う。こうした時代に、あれほどブルターニュの森を愛したメルランの住む場所があろうはずもない。実際、この急激な進歩の最初の犠牲者は、ほかならぬそのメルランの子孫たち、つまりは語り部だった。

ところで、今世紀になってから、知識人の間には、しばしば農民出身者の姿が見受けられるようになる。そのひとりにピエール・ジャケ・エリアス Pierre



Jakez Hélias がいる。ビグーダン地方のブルトン語圏の村に生まれた彼は、「共和国の学校」でフランス語を学び、教師に、さらにはジャーナリストになり、長じては古典文学の大学教授資格も手にする。そして、このエリアスとともに、私たちはブルターニュ文化の新たなルネッサンスに立ち会うことになる。それは彼が1975年に出版した一冊の自伝的な本に始まる。『誇り高き馬』（副題「ビグーダン地方の一ブルトン人の回想」）*Le Cheval d'Orgueil, Mémoires d'un breton du pays bigouden* と題されたその書物は、著者の幼年時代と今世紀前半の農民の生活を描いたものだったが、出版以来多くの読者を惹きつけ、予想外の成功、それも国境を越えた成功を収める<sup>36</sup>。しかしまた、同時代のブルターニュの文化運動に対するエリアスの態度は、彼を「過去追慕者」ときめつけるグザヴィエ・グラール Xavier Grall を初めとするブルターニュの運動家の批判を呼ぶことにもなった。いずれにせよ、彼なくして、私たちがバス・ブルターニュの文化を内側から知る機会はなかつただろう。

ところで、ここでエリアスが重要なのは、なによりも彼がブルターニュの口承文化の最後の生き証人のひとりだったからである。『誇り高き馬』のなかで、彼は読者に含蓄に富んだひとりの語り部を紹介している。彼の母方の祖父、アラン・ルゴッフ Alain Le Goff である。この名高い書物から一節を引こう。「彼は私がこの世で出会った最高のひとだった。(.....) 彼が死んだのは私が20歳になったばかりの頃で、私はすでにいわゆる高等教育を終えていた。しかし、これまでいかなる哲学者も彼ほどに強い印象を私に与えたことはない」<sup>37</sup>。幼少期のエリアスを魅了したこの老人は、彼に語り物の楽しみを教えた。祖父の死後しばらくしてから、エリアスはブルターニュの口承文化の調査に熱心にとりくみ始める。まるで祖父の幻影を追い求めるかのように、彼は何年にもわたってブルターニュのブルトン語圏を踏査し、昔ながらの語り部たちと知り合いになる。彼を駆り立てていたのは、たんに過去追慕の感情ばかりではなかつた。彼には、こうした語り部たちの記憶が忘却から救われれば、新旧を問わず人間に関するあらゆる学問に役立つはずだという確信があつたのである。エリアスは言う。「語り部がひとりこの世から消え去るとき、もしその記憶を継承するも

のがいなければ、一個の図書館が燃えてなくなるのも同じだ」<sup>38</sup>と。

さて、のちに自らも語り部となるこのエリアスは、彼が「最後の語り部たち」と呼ぶ人々について多くの証言を残した。20世紀のバス・ブルターニュで、彼らはどんな暮らしをしていたのか。エリアスによれば、この小メルランたちは相変わらず昔ながらの属性を捨て去ることができずにいた。つまり、貧困である。なぜか。エリアスの言葉に耳を傾けよう。「私はこれまで金持ちの語り部など見たことはない。別にそんなものはいないと断言するつもりはない。しかし語るためには、どこか現生の利益から超越していなければならないということは言えると思う。(.....) 自分のものに執着すれば、すべての人のもの、一銭にもならないものへの顧慮を妨げる。(.....) ひととは現世の利益から超越していればいるほど、上手に語ることができるのだ」<sup>39</sup>。

人々を喜ばせることのみが語り部の目的ではなかった。彼らは物語から、よき人生を送るための道徳的な教訓を引きだしていた。不幸な人にたいする慈悲、動物にたいする慈愛といったものを教えていた。それゆえ、ふつう語り部は年のいった人たちだった。もう一度、エリアスの言葉に耳を傾けることにしよう。「私が聴いた語り部は、わずかな例外をのぞいて、皆かなりの年齢に達した人たちだった。語るためには、そのまえにまず自分のうちに長年の観察の果実を積み上げ、それが自ずとなんらかの形をとるまで、じっくりと待たなければならない。さもなければ、たんなるつまらない逸話に、その場を盛り上げるだけの、たんなる宴会の余興になってしまうだろう。ある語り部が私に言ったように、物語の真の内実をなすものは、経験なのだ。さらに言えば、経験はまさにそのためにのみ役立ち得る。ひとは四五十になって初めて語り始めるのだ」<sup>40</sup>。しかし皮肉なことに、第二次世界大戦後、急速に語り部がいなくなっていくのも、まさにこの高齢のせいだった。エリアスはすでに1977年にこう書いている。「語るとは何かをちゃんと心得た人が、始めから終わりまで、きちんと慣習どおりに語ったブルターニュの民話を最後に聴いてから、もう7年になる」<sup>41</sup>。

もっとも、エリアスが長年にわたって忍耐強く続けてきた調査は、彼に多くの忘れ難い出会いをもたらした。彼が死の5年前に発表した『記憶の施しを乞

う人』 *Le quôteur de mémoire* からそうした出会いのひとつを紹介しておこう。

ある日、彼はモン・ダレーの人里はなれた小村に赴こうとしていた。そこにひとりの老人がいるという話を聞いていたのである。その老人はあまり人付き合いのいい方ではないが、興が乗ったときにはとても面白い話を聞かせてくれるということだった。だから、彼に会ってみる必要があったのである。エリアスはやっと車が通れるほどの、うねうねと入り組んだ土の道で何度も迷い、ついには急な坂道の下で車をぬかるみにとられてしまう。仕方なく車を降り、溝だらけのがたがたの小道しかない場所をやっとの思いで分け入ると、目の前にこじんまりとした広場が現れる。そこで、その老人は彼を待っていたのである。そして、寄り掛かっていた二つの杖の一方をエリアスを迎えるために振り上げると、ブルトン語でこう言ったのだ。「記憶の施しを乞う人、とうとうここまでやって来たね」。

エリアスは「記憶の施しを乞う人」というこの名前に強い印象を受ける。というのも、その呼び名は、彼が四半世紀にわたって専念してきた仕事と、その手順を見事に表現しているように思われたからだ。彼は言う。「私は施しを求めてきたのだ。(.....) いまや消え去らんとしている一個の知恵をしっかりと宿した、昔の記憶という小銭をたくさん集めて、自分を贖おうとしていたのだ」。彼はこう自問する。「つまるところ、もしかしたら私は円卓の騎士たちが長い間求めてきた、あの聖杯の影を追っていたのではないか」と。そして、こうつけ加える。「この老人が私の意図をあれこれ詮索することもなく、有益な話を惜しげもなく聞かせてくれたことは言うまでもない」<sup>42</sup>。

さて、エリアスが行ってきた現実の探求は、こうしてケルト世界の伝統的な騎士物語のそれと重なり合うことになる。ここで私たちはこの老人の背後に、もうひとりの老人を、かつて円卓に座るに相応しい騎士たちを選んだ、別の時代のもうひとりの老人の姿を想像したい誘惑に駆られないだろうか。もちろんエリアスはここでその老人の名を口にしてはいない。しかし、現実と想像の世界をつなぐあの分ちがたい絆を思うとき、私たちはこの人物が、ピエール・ジャケ・エリアスの作品に登場する、粗野でありながら知恵に満ちたあの老人

たちを、時宜を得て現れ、善き道を指ししめす、あのすべての老人たちを象徴しているかもしれないということに気づくのである。そして、そのときまた私たちは、われらが魔術師メルランは、たとえ彼が象徴するひとつの生きた伝統が消え去ったあともなお、ブルターニュの想像力のなかに生き続けるし、今後もまた生き続けるであろうということを感じさせられるのである。

最後に、同じ『記憶の施しを乞う人』からもう一節だけ引くことにしよう。著者は往時の夜の集いを回想しつつ次のように語っている。「こうして聴衆は、しだいにクリスマスによって象徴されるキリストの霊性の頂点へと導かれていくのだった。その後、新年のお祭りが来ると、気分はまたも世俗的になり、語り手もその出し物の趣を変えた。そんなとき、夜の集いでは、聴くものを啞然とさせる驚異のエピソードに彩られた、この世とあの世を股にかけた冒険物語が好んで語られたものだった。そこにはまだ円卓の騎士たちの記憶が残ってはいたが、田舎の人間に見合うように内容を変えられていた。剣槍に秀でた高貴な騎士たちは、鉄の棒をもって道を歩くだけのただの庶民になった。しかしその彼らもやはり手柄を立てると、王国とは言わぬまでも、たっぷりと金を与えられたり、夢のような邸を手に入れたりはするのだった。そこにはもはやトリスタンの姿も、ランスローの姿も、ゴーヴァンやアーサー王やイゾーの姿もなかった。けれども、魔術師メルランは、いろいろな人間に変装して、いつもわれわれの前に姿を現したものである」<sup>43</sup>。

### 註

本稿は1999年9月11日－12日に名古屋大学で行われた比較神話学国際シンポジウム「東西の老賢者－MERLIN」においてフランス語で発表された原稿に、大幅な加筆を施したものである。

- 1) 以下のメルランに関する記述では、上述のシンポジウムにおける個々の発表が大いに参考になった。
- 2) Paul Zumthor, *Merlin le Prophète*, 1973, p.275
- 3) *Ibid.*

- 4) ブロセリアンドの森の生成とメルランの墓の関連については, Marcel Calvet の以下の二論文を参照。 *L'invention du Val sans retour, Genèse d'un paysage*, in *Du folklore à l'ethnologie en Bretagne*, Brasparts, Betlan, 1989, pp.39-48; *Brocéliande et ses paysages légendaires*, in *Ethnologie française*, 1989/3, pp.215-226.
- 5) Félix Bellamy, *La forêt de Brocéliande* T2, La Découvrance, p.656-657.
- 6) F.Bellamy, 前掲書, p.658.
- 7) Cambry, *Voyage dans le Finistère*, 1793, p.289
- 8) F.Bellamy, 前掲書, p.655.
- 9) *Ibid.*, p.628.
- 10) Théodore Hersart de La Villemarqué, «Visite au tombeau de Merlin», in *Revue de Paris*, mai 1837, pp.45-62. なおブルトン語の引用部分は本文では注釈にある。
- 11) Donatien Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, Armen, 1989, p.11.
- 12) ここでは煩雑さを避けるため『バルザス・ブレイス』の版の問題については一切考慮を払わなかった。この書物には3つの異なった版(第一版は1839年, 第二版は1845年, 第三版は1867年)があり, それぞれの版における内容の異同も無視しえぬほど多い。たとえばメルランに関する歌も, 本文に記した4つの歌が揃うのは第三版になってからで, 最初の二版には Merlin-Devin, Merlin-Barde の二つしかなかった。こうした版の問題も含めた『バルザス・ブレイス』論争全般については, また稿を改めて論じるつもりである。
- 13) T.H. de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz*, Librairie académique Perrin. 1963, p.57.
- 14) *Ibid.*, pp.56-57.
- 15) *Correspondance Luzel-Renan*, Presses universitaires de Rennes, Terre de Brume, 1995, p.162.
- 16) *Ibid.*, p.121.
- 17) Françoise Morvan, *François-Marie Luzel*, Presses universitaires de Rennes, Terre de Brume, 1999, pp.198-199.
- 18) D.Laurent, «Des antiquaires aux folkloristes: Découverte et promotion des littératures orales», in: J.Balcou/Y.Le Gallo (éd), *Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne*, Champion-Coop Breizh, 1997, p.344.
- 19) T.H. de La Villemarqué, *Myrdhin on l'enchanteur Merlin*, Terre de Brume. 1989, pp.94-95.
- 20) *Ibid.*, p.95.
- 21) Gustave Flaubert, *Voyage en Bretagne. Par les champs et par les grèves* (1847), réédition Bruxelles, Complexe, 1989, pp.199-200.
- 22) T.H. de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz*, p.XXXIX.
- 23) Guy Haudebourg, *Mendiants et vagabonds en Bretagne au XIX<sup>e</sup> siècle*, 1998, pp.53-60.
- 24) Emile Souvestre, *Les Derniers Bretons* T1, Terre de Brume, 1997, p.61.
- 25) *Ibid.*, p.189.

- 26) T.H. de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz*, p.61.
- 27) *Ibid.*, p.68.
- 28) *Ibid.*, p.74.
- 29) *Ibid.*, p.IV.
- 30) Eugen Weber, *La fin des terroirs*, Fayard, 1983, p.25
- 31) Anatole Le Bras, *Magies de la Bretagne* T1, Bouquins, 1994, p.1148.
- 32) T.H. de La Villemarqué, *Myrdhin ou l'enchanteur Merlin*, p.11.
- 33) François-Morin, *Journal de route*, Presses universitaires de Rennes, Terre de Brume, 1994, p.136.
- 34) Morvan Lebesque, *Comment peut-on être breton?*, Seuil, pp.28-29.
- 35) *Correspondance Luzel-Renan*, p.195.
- 36) この作品はこれまで18カ国語に翻訳されている。
- 37) Pierre-Jakez Hélias, *Le Cheval d'Orgueil*, Plon, 1975, pp.28-29
- 38) P.-J. Hélias, *Le quêteur de mémoire*, Plon, 1990, p.203.
- 39) P.-J. Hélias, *Les Autres et les Miens*, Plon, 1977, pp.126-127.
- 40) *Ibid.*, pp.126-127.
- 41) *Ibid.*, p.156.
- 42) P.-J. Hélias, *Le quêteur de mémoire*, p.168.
- 43) *Ibid.*, p.237.